

「アドラー心理学」と「フレーベル」

～共同体感覚の育成をめぐる～

吉田美由紀 (熊本)

要旨

キーワード：

本稿は、平成 21 年アドラー心理学会総会の一般演題で発表させて頂いた原稿を基にしたものです。発表時、スライドで図や映像を使用した部分につきましては、本稿では言葉に置き換えております。

1. はじめに

「子どものライフスタイルは、通常 4 歳から 5 歳までに決定される」^(注1) 「この頃までに子どもは、共同体感覚と、[社会] 適応のために必要な柔軟さを発達させなければなりません」⁽¹⁾ とアドラー Alfred Adler (1870-1937) は述べています。同じように、乳幼児期に「共同感情」を育成することの重要性を説いた人が居ます。幼児教育の父と呼ばれるフリードリッヒ・フレーベル Friedrich Fröbel (1782-1852) です。

乳幼児期に、共同体感覚や共同感情を育成するとは、どういうことなのでしょう？ また、何故育成されなければならないのでしょうか？そして、それはどのように育成することができるのでしょうか？

そこで、今回はアドラー心理学とフレーベルの教育理論を基に、乳幼児がその大半を過ごす家庭や保育所における、共同体感覚・共同感情の育成について考察してみたいと思います。

(注1) 訳者注：現代アドラー心理学ではもう少し遅く、10 歳前後であるとしている。

2. フリードリッヒ・フレーベルについて

「さあ、私たちの子どもらに生きようではないか！」⁽²⁾ という有名な言葉を残したフリードリッヒ・フレーベルは、ドイツに生まれました。当時の社会は、産業革命が進み、多くの母親達が長時間労働に携わり、子どもは放任されていました。スイスの教育者ペスタロッチ Johann Heinrich Pestalozzi (1746-1827)^(注2) の実験学校に参加したフレーベルは、就学以前の子ども達の教育こそが大切であると気づき、世界で初めて幼稚園を創設しました。『人間の教育』を著し、幼児教育における母親の役割の重要性を説き、遊具である『恩物』を考案し、幼児教育の専門家の育成

にも力を入れました。彼が創設した『キンダーガルデン』は、やがて世界へと広がりました。

日本では明治9年、東京女子師範学校に初めて幼稚園が付設されました。またフレーベルが考案した運動遊戯は、音楽教育と道徳教育を目的として、伊澤修二（後の芸術大学初代学長）により導入されました。

（注2）ペスタロッチは、鞭と罰以外の教育の方法を見出した最初の教師であると言われ、彼の教育原理はフレーベルに大きな影響を与えました。

3. 「共同体感覚」と「共同感情」について

アドラーの言う「共同体感覚」とは、「人はこの世界に一人で生きているのではないので、自分だけではなく、他者にも関心を持たなければならない。そのような人の集合体としての共同体（既存の社会を指しているのではない）への所属感を持ち貢献すること」^{〔3〕}を意味しています。

フレーベルは、「共同感情」について、「共同的なものの、即ち共同性のこの最初の感情、それはまず子どもを母親と父親と兄弟とに結びつける。またより高次の精神的な結びつきがその基礎になっている。」「この共同感情は、あらゆる真の宗教心の、永遠との、神との妨害なき合一へのあらゆる真の努力の最初の芽生えであり、最初の発端である」^{〔4〕}と述べています。

4. 「共同体感覚」と「共同感情」に関する共通点

まず、アドラーとフレーベルの子どもの教育に関連する図書から、共同体感覚・共同感情についての考え方の共通点を探ってみますと、次のような事柄があげられます。

（1）母親の役割が重要である

アドラーは、「母親は、共同体感覚発達の入り口に立っている最初の仲間」^{〔5〕}であり、「子どもを人生の課題に対する準備をさせ、子どもの関心を他の人とこの世の人生のすべてのものに対して広げる」^{〔6〕}という重要な役割を持っていると述べて、母親が共同体感覚育成のキーマンであることを示唆しています。

フレーベルは、「母親は、意識的な存在として、意識をもちつつある存在にはたらきかけつつ、自覚的に、かつ人間のたえざる発達のために指導すべきものとして、このことをあるたしかに内面的な、生きた、自覚的な関係のなかで、またその関係でもってなすことが、必要である」^{〔7〕}と、子どもに最初に接する大人としての重要性を自覚し、育児をするように求めています。

（2）共同体感覚・共同感情は育成されなければならない

アドラーは、「動物の生活全体において、子どもがこのようなまったく無力な状態で生まれてくるのは、人間だけです。また、人間の子どもは、成熟するのに最も長い時間を必要とします」^{〔8〕}という身体的な弱さから、集団への依存が必至であり、それゆえ、共同体感覚を発達させなければならないと考えます。また、共同体感覚は、生まれつきのものではなく「意識的に発達させなければならない先天的な可能性」^{〔9〕}であるとも述べています。

フレーベルは、共同感情は宗教心の芽生えであるとしていますが、この「宗教心は、乳呑子の時に人間に始まらなければならぬ。」^{〔10〕}といい、「そして、このおぼろげな予感、この灰白色よりも更におぼろげな意識は、人間の心の中に早くから保育され、強化され、養われ、後にはつき

りした自覚にまで高められ、純化されなければならない」^{〔11〕}としています。

(3)問題のある子どもは、共同体感覚・共同感情が育成されていない

アドラーは、「私達が教育困難であると見なす子どもたちは、他の人の幸福に関心がありません。このような子どもたちは、共同体感覚、楽観主義、勇気を欠いています。」^{〔12〕}と、述べています。また、「この[甘やかされた]子どもたちも、二番目の[憎まれた]タイプである子どもたちも、皆、共同体感覚を持っていません。他の人に関心を持っていないのです。甘やかされると、自分の幸福のことにしか関心を持たなくなります。憎まれた子どもは、仲間がいるということを知りません。仲間[の存在]を体験したことがなかったからです。自己中心的な関心だけが育ち、増していきます。[しかし]このようなことは決して生まれつきのものではなく、最初の数年の体験にもとづいているのです」^{〔13〕}とも述べています。

フレーベルは、少年期に現れる様々な弊害は、「一に両親と子どもとの間の共同感情が幼い時から幼児及び少年の中に覚醒されず、後になって幼児や少年の中で養われなかったばかりではなくて、反対に幼児の時から否定され乱されたことに原因がある」^{〔14〕}と述べています。

5. 「共同体感覚」と「共同感情」についての相違点

(1)問題のある子どもの理解と対応

アドラーは、「個人の主体性」^{〔15〕}という考え方で、問題の子どもを理解しようとしてきました。「成長のまっすぐな道から我々をそらすことになるのは、我々の『客観的』な経験ではなく、出来事についての個人的な『態度』と『評価』であり、出来事を我々が評価する『仕方』である」^{〔16〕}と述べています。子どもが環境に対して行う個人的な解釈が子どもの行動を決定しているのです。ゆえに、「大人が子どもの状況を子ども自身の目で見て、子ども自身の誤った判断で状況を解釈する」^{〔17〕}ことが必要となります。「子どもが論理的に一即ち、大人の健全なコモンセンスにしたがって一行動すると考えてはなりません。むしろ子どもたちが、自分自身の立場を解釈する時に、誤りを犯すということを認める用意がなければなりません。実際、子どもたちの教育は、子どもが誤るという事実がなければありえないということを忘れてはなりません」^{〔18〕}と、子どもの誤った解釈を理解し対応することの大切さを述べています。

フレーベルは、「逆推論」をもって子どもを理解しようとしてきました。「事物の本質は、常にある関係において、外的なものから内的なものが、内的なものから外的なものが逆の関係で推論されることを、要求する。」^{〔19〕}「上述の真理を適用しないこと、あるいはむしろその適用を誤ること、即ち児童の生活及び少年の生活におけるある外的な現象からその現象の内面的なものを直線的に推論することは、子どもとの対立をひきおこし、子どもの反抗心を呼びさます最も本質的な根拠であり、日常生活の中で、また教育の中でしばしば起る誤りの最も本質的な根拠である。ここにこそ、幼児・少年及び青年に対する無数の誤解の確かな根がある」^{〔20〕}と述べ、「そのゆえ、その真理の応用は、両親、教育者及び教師にとって非常に重要であるので、彼等はこの真理の応用に細部にわたって習熟するようあげて努力すべきである」^{〔21〕}と注意深い対応を求めています。が、「しかし、内面的なものの損傷の現れを確実に証明することは、絶対困難であるというわけではないが、甚だ困難なものである。少くとも、あらわれてきた損傷の根拠や始まりが一体どこにあるのか、またそれはどこで現在のような方向が生じてきたのかという点、即ち損傷のみなもとを確実に証明することは、しばしば困難なものである。」^{〔22〕}とも述べています。後にアドラーが「個人の主体性」として発見した概念をフレーベルは、見い出せなかったのです。

(2) 共同体感覚・共同感情の育成

アドラーは、「どの人にも共同体感覚をかきたてたいと思うならば、母親の二つの働きを果たさなければなりません。私たちは、子どもたちの信頼を得、他の人へと関心を向けるという課題を持っているのです」^[23] と言い、「親の課題は、自分で自分のことができるようになるように、子どもにできるだけすぐれた人生の準備をすること」^[24] だと言います。「人が本当に他の人に関心を持ちたいと思い、公共の目的のために働きたいと思うのであれば、まず自分自身の世話ができなければなりません」^[25] ということなのです。

フレーベルの特徴は、子どもの連続的発達を重要視し、遊戯(あそび)を通し共同感情や道徳心を育てるという考え方にあります。「人間の発達が一点から連続的に前進してゆくということ、連続的に前進してゆくものとして認められ、常にそのようなものとして注意されるということは、人間の内心に神的なもの及び宗教的なものを形成するという点においてだけではなくて、人間の形成全体にとって非常に重要である」^[26] と述べています。そして、「遊戯は、幼児の発達の、この時期の人間の発達の最高段階である。」「あらゆる善の源泉は遊戯にあり、また遊戯から現れてくる。しっかりと、自発的に、黙々と、忍耐がよく、身体がつかれるまで根気よく遊ぶ子どもは、きっと、また有能な、黙々として忍耐づよい、他人の幸福と自分の幸福のために献身する人間になることであろう。」^[27] 「この時代の遊戯は、すでに前にのべたように、単なる遊び戯れ(Spielerei)ではない。それは、高い重要性和深い意義を持つものである。ゆえに母親よ、子どもの遊戯を養い育てよ！父親よ、子どもの遊戯を保護してやるがいい。」「遊戯において人間の全体が発達し、全人間のもっとも清純な素質、内面的な心があらわれてくるからである」^[28] と宣言しています。つまり、フレーベルは、子どもは発達に応じた遊戯を通して、共同感情を養っていくと考えていたと理解することができます。

6. 保育への応用

では、保育の現場では、どのような形でフレーベルやアドラーの考え方が生かされているのか検証してみたいと思います。

(1) わらべうた

保育の中で日常的に遊ぶわらべうたは、フレーベルが考案した「表現遊戯」が原型となつていると思われまふ。表現遊戯は、「子どもたちが形や形態を模倣することを通して、身のまわりの自然や生活空間を観察させ、遊戯を成立させている集団の秩序やルールを要求することによって、一体感や共同感情を自発的に目覚めさせようとするもの」^[29] です。「ここでは子どもたちは、自分が部分的全体であることを体験し、社会に適應することを遊びながら習うのである。そして誰もが遊戯の成功のために助け合う」^[30] のです。

(2) 遊び(積み木・ままごと等)

フレーベルは、発達の連続性を重要視し、年齢発達に応じた遊びを遊ぶことこそ健全な精神を育むと考えました。その考え方が現代の保育にも浸透しているのでしょう。園では、年齢発達に即した環境を整え、発達課題に即した遊具(積み木等)を提供して、子どもの自発的な遊びを誘い出しています。

子どもの自発的な遊びは、「外的世界への鍵であり、同時に、内的世界の覚醒に最も適した手段」^[31] です。子どもは遊びを通して内的なものを表現し、表現することによって外的世界に繋

がり、外的世界との繋がりの中で自分自身の内的世界を見い出します。友達との遊びの中で、子どもは、全体の一部である自分を感じ、自分が個人として集団の中でどのように動けばよいのかを学びます。そして、遊びを通して得た自己肯定感や自信や有能感は、子どもの内的世界に蓄積されていき、そこから外的世界への信頼感も生まれていきます。

(3) 自立への援助

おおむね3歳の保育課程は「基本的生活習慣の形成」^[32]ですが、それは子どもへの「1万回の声かけを通して確立されていく」^[33]とされています。ともすれば機械的な対応になりがちな保育実践（たとえばオムツ交換等）で、アドラーの相互尊敬、相互信頼に基づいて1万分の1回を、その都度子どもと協力しながら丁寧に行っていくことで、子どもの中に自尊感情を培っていくことができます。そして、それは人や社会に対する基本的な信頼感へとつながります。子どもは自立へ向かいながら社会と調和することを学んでいくのです。

(4) 子ども理解と個別の対応

保育の中で、問題のある子の対応に追われることは、多々あることです。しかし、アドラー心理学を応用し、子どもの行動の目的や個別性を理解し、対応することで、子どもを勇気づけ、自信を与えることができます。

7. 実際の保育に見る共同体感覚の育成

(ビデオ1) わらべうた遊び

わらべうたを遊んでいる最中に、二人の子どもがけんかを始めました。保育士は、けんかが終わったらわらべうたの輪に入るように伝え、子ども二人はけんかを終わらせました。他の子ども達はわらべうたを続けていたのですが、二人が輪に近づくと、一人の子どもがサッと手を差し伸べ、二人の子どもを輪に入れてくれました。自分はわらべうたを遊び続けながら、なおかつ輪の外にいる友達のこともしっかりと考えており、ルールに沿って遊べる状態になったら何のためらいもなく自ら手を差し伸べ、遊びを続行していこうとする姿がありました。そこに自立と社会性の育ちを見ることができました。

(ビデオ2) 再現遊び

5歳児クラスで、ごっこ遊びが始まっています。ヒーローショーを家族で見に行く遊びです。ショーマンやチケット売りやお父さん、お母さんの役遊びが始まり、お母さんはドレスアップし、赤ちゃんを連れて出かけます。お父さんは、お弁当を作り、缶ビールを持ってお出かけです。会場では、赤ちゃんを抱いているお母さんに、お隣の奥さんが「大変でしょう」と声をかけ抱いてくれます。お父さんはヒーローに「がんばれー」と声をかけながら、ビールを飲み、お弁当を食べてごきげんです。このように再現遊びの中で子ども達が自分の役割を担い、集団の中で貢献的に動いたり協力したりすることを通して、共同感情が育成されていると考えることができます。

(ビデオ3) オムツ交換

1歳児クラスのオムツ交換の場面です。時間にしてわずか1分の動きですが、保育士は、一方的にオムツを交換するのではなく、ズボンの上げ下ろしのひとつひとつの行為に子どもの同意を得て、子どもの視線が行為に結びつくのを待って、子どもと協同してオムツ交換をすすめていき

ます。そうすることで、「行為の主体は自分である」ことを意識してもらっています。子どもは保育士を信頼し、はずしたオムツを覗き込み、おしっこがいっぱい出たことを「(イ) ッパイ、(イ) ッパイ」と片言で喜びます。保育士は、子どもの喜びを自分の喜びとして受け止め、「いっぱい出たねえ」と共に喜んでいきます。一方的にオムツを交換していたら、子どもは、他者の行為に身を任せる王様になってしまうでしょう。保育士と子どもが協同することで、子どもは「私は能力がある」^[34]と感ずるでしょうし、おしっこが出たことを一緒に喜び、出来ない部分を援助してくれる大人が居ることで、「人々は私の仲間だ」^[35]と感ずるでしょう。アドラーが言うところの相互尊敬・相互信頼の中で、子どもが自立と社会性を学んでいく様子が見えます。

8. 最後に

アドラーとフレーベルの共同体感・共同感情の育成についての考えを考察したところ、二人の考えは対立するものではなく、保育現場において補完的に応用できるものであることがわかりました。保育現場での保育士の役割は、主に育児と遊びの援助に分けられます。育児とは、食事・排泄・衣服の着脱・睡眠が一人でできるように援助することを指しますが、アドラー心理学に基づき相互尊敬・相互信頼の中で育児を行っていくことにより、子どもは大人を受け入れ、協力的に動けるようになり、他の大人や子どもに対しても心を開いていくようになります。遊びの場面では、フレーベルの教育学の立場から、子どもの「発達段階」をおさえ、発達に即した「自発的遊び」を誘い、遊びを通して自己肯定感や社会性を獲得していけるように導いていくことができます。そして、子どもの不適切な行動にたいしては、アドラー心理学を用いた理解と対応を行っていくことで、共同体感を持ったより健全なパーソナリティを発達させることができるのではないかと思います。

この発表を通して改めて気付いたことがあります。それは、共同体感や共同感情の育成の鍵を握るのは、母親だということです。アドラーもフレーベルも子どもを社会につなぐ存在としての母親の役割を非常に大切だとしているのですが、そのことを知識として獲得している母親は少ないのではないのでしょうか？ 今後は、この学びを基に、子育て支援の場などで、母親の役割の重要性について発信していきたいと思ひます。

引用文献

- [1] A. アドラー著 岸見一郎訳「子どもの教育」一光社 1998年 p.125
- [2] 小笠原 道雄著「フレーベル■人と思想 164」清水書院 2000年 p.173
- [3] A. アドラー著 岸見一郎訳 「教育困難な子どもたちーアドラーセレクション」アルテ 2008年 p.168
- [4] F. フレーベル著 岩崎次郎訳 「創業五十年記念出版 世界教育学選集9 人間の教育1」明治図書出版 1972年 p.30
- [5] A. アドラー著 岸見一郎訳 「生きる意味を求めてーアドラーセレクション」アルテ 2007年 p.37
- [6] 前掲 [3] p.117
- [7] 前掲 [4] p.56
- [8] 前掲 [1] p.112

- [9] 岸見一郎著「アドラーを読むー共同体感覚の諸相」アルテ 2006年 p.42
- [10] 前掲〔4〕 p.30
- [11] 前掲〔4〕 p.31
- [12] 前掲〔3〕 p.18
- [13] 前掲〔3〕 p.16
- [14] 前掲〔4〕 p.111
- [15] 前掲〔9〕 p.61
- [16] エドワード・ホフマン著 岸見一郎訳「アドラーの生涯」金子書房 2005年 p.257
- [17] 前掲〔1〕 p.93
- [18] 前掲〔1〕 p.93
- [19] 前掲〔4〕 p.12
- [20] 前掲〔4〕 p.13
- [21] 前掲〔4〕 p.13
- [22] 前掲〔4〕 p.16
- [23] 前掲〔3〕 p.118
- [24] 前掲〔1〕 pp.105-106
- [25] 前掲〔1〕 p.187
- [26] 前掲〔4〕 p.32
- [27] 前掲〔4〕 p.50
- [28] 前掲〔4〕 p.51
- [29] 奥中康人著「国家と音楽・伊澤修二がめざした日本近代」春秋社 2008年 pp.113-114
- [30] 小笠原道雄著「フレーベルとその時代」玉川大学出版部 1994年 p.313
- [31] 前掲〔30〕 p.238
- [32] ミネルヴァ書房編集部編「保育所保育指針 幼稚園教育要領 [解説とポイント]」ミネルヴァ書房 2006年 p.76
- [33] 和地由枝「生活習慣ルールと環境」プリント p.2 2002年
- [34] 野田俊作著「PASSAGE」アドラーギルド 2005年 p.1
- [35] 前掲〔34〕 p.1

参考文献

- (1) R. ボルト, W. アイヒラー著 小笠原道雄訳「フレーベル生涯と活動」多摩川大学出版部 2006年
- (2) A. アドラー著 岸見一郎訳「個人心理学講義」一光社 1996年
- (3) R. ドライカース著 宮野栄訳「アドラー心理学の基礎」一光社 1996年

更新履歴

2013年6月1日 アドレリアン掲載号より転載